竹内 西光院 木造 阿弥陀如来坐像 修復報告書

西光院　木造 阿弥陀如来坐像

修復報告書

平成 31 年 2 月 15 日

巧匠堂

竹内 西光院 木造 阿弥陀如来坐像 修復報告書

作成日：平成 31 年 2 月 12 日

委　　託　　者　：　西光院　（奈良県葛城市竹内 959）
修 復 責 任 者　：　吉水快聞
施　　工　　者　：　吉水快聞　鈴木冬覺　畑景子
修　復　期　間　：　「台座光背」平成 25 年 10 月 3 日～平成 30 年 12 月
　　「本体」平成 30 年 8 月 6 日～平成 31 年 2 月 15 日
目　　的　：　解体状態の台座光背の組み上げ構造強化、本体の尊容回復
内　　容　：　台座光背の解体、構造強化、欠失・亡失部分の補作、
　　各部材の再接合、組み上げ、クリーニング、剥落止め
　　必要とみられる後補の漆箔層の除去、漆箔層の剥落部分の補彩
　　漆塗、補箔、目の描き直しなど。

【法量】（約mm）

総高（台座光背含む）　1918

◇阿弥陀如来立像本体

像高　815　　髪際高　687　　白毫高　654　　耳張　223
像奥　481　　腹奥　292　　胸奥　249　　面奥　227　　膝前張　655

◇光背

総高（ホゾ含む）　1440　高（ホゾ含まない）　1340　ホゾ高　100
最大幅　968　　最大奥　270

◇台座

最大高 592　地付～蓮台天面まで　578　　最大幅　973　　最大奥　852

【制作年代】

本体の制作年代については、造形や欅材とみられる木芯を含む一木造の特徴などから 10 世紀～ 11 世紀初め頃の作例とみられるが、表面の漆箔層が少なくとも 2 ～ 3 回ほど塗り重ねられているため、かなり造像当初の姿からは印象が変わっていると考えられる。また両手先は後補であり、形状や修復の痕跡から他の像からの転用である可能性がある。台座光背に関しては後補で江戸時代に作られたものとみられるがはっきりした年代は分からない。

【保存状態】

[本体]

・少なくとも２～３回の塗り直しと金箔の貼り直し、目などの描き直し等がみられる。
・螺髪（おそらく後補）に所々、脱落や亡失がみらえる。
・欅の木地部分は虫食いが激しいものの、欅材の特性か比較的堅牢である。しかし、後世の塗り直しが行われた時点でかなり表面の劣化は激しかったとみられるため、彫刻面がかなり崩れているとみられる。
・両手先後補、もしくは他の像からの転用の可能性が高いく、塗りなおされた漆箔層の剥落箇所から状態の悪くない漆箔層がみえる。
・左手先の接合の緩みがみられる。
・全体的に油煙や埃の堆積がみられる。
・各部材の接合部分に隙間がみられる。
・漆箔層の剥落や浮き上がりがみられる。
・両もも側面の体幹部材と膝前部材をとめている鎹が表面に露出している。

［台座］

・少なくとも３回ほど塗り直しが行われている。
・構造が非常に脆弱で、芯棒も通っておらず、現状で解体状態にある。
・蓮華座の蓮弁等に欠失、亡失が見られる。
・全体に油煙や埃の堆積がみられる。
・漆箔層の剥落浮き上がりがみられる。
・鼠がかじったであろう穴が２か所確認される。
・蓮弁１枚亡失。
・框部分は近年、須弥壇と共に塗り直しが行われた形跡がみられ、その時に敷茄子などの漆箔の部分にも黒い塗料がところどころ付着している。

[光背]

・接合部分が経年劣化で遊離したり、脱落したりしており、針金を巻いて応急処置が随所で行われている。
・周縁部に欠失・亡失がみられる。
・全体に油煙や埃の堆積がみられる。
・漆箔層の剥落浮き上がりがみられる。

【修復方針】

［本体］

◇本体は現状維持を基本とし必要に応じて、後補の漆箔層の除去、剥落止め、補彩、欠失した部材の補作を行い、 尊容の回復を行う。

◇両手先に関しては、状態の悪くない下地層が見えてるので、最上層の漆箔層を除去する。

◇体幹部材と膝前材を接合している両側面の鎹は表面に露出し錆がでているので抜いて、打ち直す。

◇像全体に油煙の付着や埃の堆積がみられ、容姿を損ねていると同時に堆積が進行により湿気やカビ、害虫被害の原因にもなるためクリーニングを行う。

◇後世に描き直された目は、時代性や尊容を損ねているので、描き直しを行う。

［台座］

◇全体に埃の堆積がみられ、湿気やカビ、害虫被害の原因にもなるためクリーニングを行う。

◇台座の蓮華部分は構造が非常に脆弱で、今後の保存に耐えかねるので、解体し蓮肉部分を制作し、構造の入れ替えを行う。

◇框部分は構造の補強を行う。

◇芯棒の制作。

◇欠失亡失した蓮弁等を補作し、違和感のないように古色仕上げとする。

◇近年の框の塗り直しが行われた時に敷茄子などの漆箔層上に付着した黒い塗料の除去。

◇必要に応じて剥落止め、補彩、漆箔を行う。

［光背］

◇解体

◇クリーニング

◇遊離した部材の再接合、組み上げ。

◇欠失、亡失箇所の補作。

◇必要に応じて、剥落止め、補彩、欠失した部材の補作を行い全体に違和感のないように古色仕上げ。

◇補強のため光背裏の矧ぎ目部分に漆で布張りで強化し、必要に応じて補強材を入れる。

修復後（全体）

修復前（本体）

修復後（本体）

修復前（本体）

修復前（本体）

修復後（本体）

修復後（本体）

台座正面

台座背面

修復前（台座）

台座蓮肉部分

蓮肉天板

修復前（台座）

台座正面

台座背面

修復後（台座）

台座左側面

台座右側面

修復後（台座）

修復前（光背）

修復後（光背）

【本体修復内容】

1　クリーニング

全体に埃の体積がみられたので刷毛を使って除去。汚れの激しい箇所はエタノール＋精製水を含ませた綿棒を用いてクリーニングを施した。

クリーニング前（背面）

クリーニング後（背面）

2　後補の漆箔層や和紙、木などで遊離してる箇所は除去

除去前　（右腹下の膝前材との付け根部分）

除去後

3 両手先の漆箔層の除去

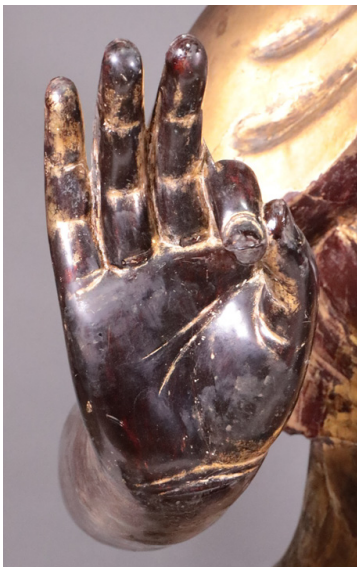
両手先は後補（転用か）とみられるが、最上部の漆箔層の下から比較的状態の良い漆箔層が見えてていたため、その層まで漆箔層の除去を行った。

残す漆箔層に傷がいかないように、ナイフを等用いて物理的にはがしていく。
剥がれにくい箇所は、精製水をしみこませた綿を湿布し、柔らかくして除去。

除去前　（左手先を外した状態）

除去後　（左手先を外した状態）

除去前　（右手先）



除去後　（右手先）

上層の漆箔層を除去すると木地が欠失したりしている箇所も出てきた。

4 鎹の周辺の後補部材の除去と鎹の打ち直し

体幹部材と膝前をとめている両太もも側面の鎹（かすがい）は表面に露出して錆が出て造形に影響が出ていたため一度抜いて、叩いて形を整え、漆を焼き付け防錆処理後打ち直した。

右太もも側面の露出した鎹

左太もも側面の露出した鎹

周囲の後補部材を取り除きながら、鎹を一度抜く

埋木をして表面を整えてから再度打ち込む

鎹は、表面は錆びていたが、まだ使用できる強度を持っていたので、熱して、叩いて成形後、漆を焼き付けて防錆処理して再利用した。

5 欠失した箇所の埋木と木屎漆の充填、錆漆塗り

各欠失箇所を檜を用いて埋木し、矧ぎ目の隙間などには、木屎漆（漆＋小麦粉＋木粉）を充填、硬化後に表面を整え、錆漆（漆＋砥の粉）を塗り研いで表面を整える。

右太もも側面の鎹周辺

左太もも側面の鎹周辺

お腹下の膝前材との付け根部分の埋木

埋木を生漆で木地固め→隙間に木屎を充填→成形

錆漆→硬化後、表面を研いで整える

6 欠失箇所の修復

裳先や手などの欠失箇所には木屎漆（漆＋小麦粉＋木粉）を盛る、硬化後に表面を成形し、錆漆（漆＋砥の粉）を塗り研いで表面を整える。

修復前（裳先）

木屎漆を盛って成形

漆箔層の除去により出てきた欠失部

木屎漆を盛って成形

錆漆→硬化後、表面を研いで整える

7 虫食い穴の充填

表面に出てきている虫食い穴には錆漆（漆＋砥の粉）を充填する。

8 錆漆の上に漆塗り

各箇所、錆漆を研いで整えた上に色漆等を塗って、質感と色味を合わせる。

朱漆の下地

赤呂色漆を塗って色味を合わせる

9 漆箔

修復箇所などに漆で金箔を貼っていく

箔押し完了　（修復箇所だけでなく、摩耗で漆の下地が出ている箇所にも必要に応じて補箔した）

10 修復箇所の古色

金箔を貼った箇所などを全体に違和感のないように、アクリル絵の具や漆などを用いて、古色仕上げとした。

お腹部分

裳先部分

左太もも側面部分

右太もも側面部分

左手先も本体に調和するよう金箔古色仕上げ

11 亡失した螺髪の補作

後頭部修復前

亡失した螺髪を檜で補作

錆漆を塗って木地固め

接着

下地に古色の白土を塗る

焼き群青を塗り、違和感のないように古色仕上げ

12 後世の修復で描かれた目の描き直し

後世に塗り直された目は、時代性や尊容を損ねているので、描き直しを行った。

修復前の目

白土を塗って白目とする

朱で瞳の周りを描く

瞳を墨で描き、目尻と目頭に群青を挿し、周りと違和感のないように古色で仕上げる

【台座修復内容】

1　搬出　解体

台座は江戸時代に補作されたものとみられるが、構造が脆弱なため自立が困難な状態であった。搬出の為に動かすと、ほとんど解体状態になったため、框を除き解体を修復を行った。

搬出前の台座光背

蓮華部分を外すと蓮弁等が崩れ落ちた

框の下の須弥壇の空洞部分には鼠が運び込んだと思られる木屑等で埋め尽くされていた。

2　框は、欅の一木造りの像や台座全体の重みを支えるには、構造上強度が足りておらず、天板が歪んでいたため、檜材の補強材を入れて強化した。

クリーニングした框を裏から見ると、外側のみの作りになっており構造が脆弱

1段目、檜材を組んだ構造を各段ごとに入れていく。（材は柿渋を塗って古色に）

2段目

3段目、框は真ん中に全重量がかかるため、隙間なく積み上げる構造とした

連結には、ステンレス製の金具に漆を焼き付け使用した

3 埋木、木地固め

鼠が空けたと思われる穴や隙間を檜材で埋木

欠失した部材についても檜で補作し接着

補った檜材に生漆を塗って木地固め

4 框の木屎漆の充填、錆付け、塗り、古色

1, 欠失部分や隙間には木屎漆を充填

2, 剥落箇所などに木漆を塗って木地固め

3, 錆漆を塗って下地を整える

4, 錆漆を研いだ後黒呂色漆を塗る

5, 塗り完了

6, 漆が硬化する前に灰などで古色付け

修復後

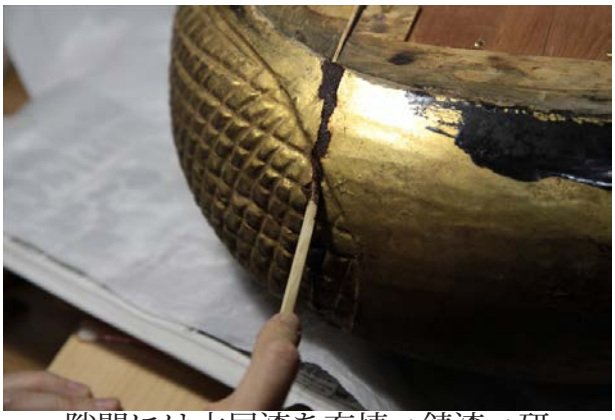
5 框上の飾りの修復

先など欠失した箇所は埋木をして
漆塗り

金箔を押して古色し、後世の修理時に付着
したとみられる黒い塗料を出来るだけ除去

6 敷茄子の修復

バラバラだった部材を組み上げ、
檜を十字に入れて構造強化



隙間には木屎漆を充填→錆漆→研
ぎ→漆塗→金箔古色仕上げ

後世の修理時に付着したとみられる黒い塗料
を出来るだけ除去

補強材に柿渋を塗って、色味を近
づけて修復完了

7 蓮肉の新補

蓮肉部分の構造材と天板は、構造上、このまま修復しても
今後の保存に耐えかねると判断したため新補することとした

檜２材を寄せて蓮肉を彫出し
干割れ防止のため内刳りを施す

元々の天面に彫刻は無かったが
蕊と種子の彫刻

底面の穴を檜材で塞ぎ、框や敷茄子
との連結用の芯棒を通し、木地完成

木地が見える可能性のある個所は柿
渋を塗って古色付け

生漆で木地固め

錆漆→研ぎを繰り返し、表面を整えてから錆漆面を地固め

黒呂色漆を塗る

表面を研いで整えた後、金箔を貼る

金箔を全体に押した状態

古色出仕上げ

8 蓮台の解体、修復

ほぼ解体状態にあった蓮弁を更に 1 枚 1 枚解体していく

各蓮弁の漆箔層の浮上がり箇所については
アクリルエマルジョンを用いて剥落止め

欠失箇所については檜で埋木

埋木箇所や剥落した箇所には錆漆を塗り
研いで表面を整える

黒呂色漆を塗り金箔を押して古色

亡失した蓮弁は檜材で補作

修復後 (一段分)

9 蓮台の組み上げ

位置を決め、真鍮釘を用いて蓮弁を蓮肉に張り付けていく

隙間が大きい箇所には埋木をして強化

色味が合わない箇所は黒漆を塗って調節

10 台座全体の組み上げ

框上に飾りの彫刻を接着、芯棒を
立てて敷茄子を差し込む

蓮華部材を差し込んで修復完了

【光背修復内容】

1 解体

針金や、紙、薄板などで補強した部分を除去して解体していく

解体後

2 クリーニング

全体に埃の体積がみられたので刷毛を使って除去。汚れの激しい箇所はエタノール＋精製水を含ませた綿棒を用いてクリーニングを施した。

3 剥落止め

それぞれの部材の漆層の浮上がり箇所には接着剤（アクリルエマルジョン）を注入し熱ゴテを用いて剥落止め処置を行った。

4 組み上げ

連結部分にはそれぞれ
竹ダボを入れて組み上げ

固定には酢酸ビニル樹脂と
ステンレス製の木ネジで固定

組み上げていくと欠失した箇所が明らかになった

5 欠失した部材の補作

檜材で欠失した箇所を補作し、酢酸ビニル樹脂で接着

6 隙間に木屎漆の充填や錆漆塗りなど

矧ぎ目や、補作した箇所の連結部分の隙間には木屎漆を充填して隙間を埋めて成形

剥落箇所や補作した箇所には木漆を塗って木地固め後、錆漆を塗って研いで表面を整える

7 布貼り（補強）

修復箇所や矧ぎ目に、光背裏面から麻布を糊漆で貼って補強

8 黒呂色漆塗り→研ぎ→金箔押し→古色付け

錆漆を研いで表面を整えたところに黒呂色漆を塗りまた研いで表面を整える

漆を塗った箇所に金箔を貼る

アクリル絵の具などで古色を着けて
違和感のないように仕上げる

9 特に負荷のかかる箇所の補強

光背下部のホゾがある部材は重量がかかり強度が必要なので檜材をステンレス製の木ネジでとめて補強

光背修復完了